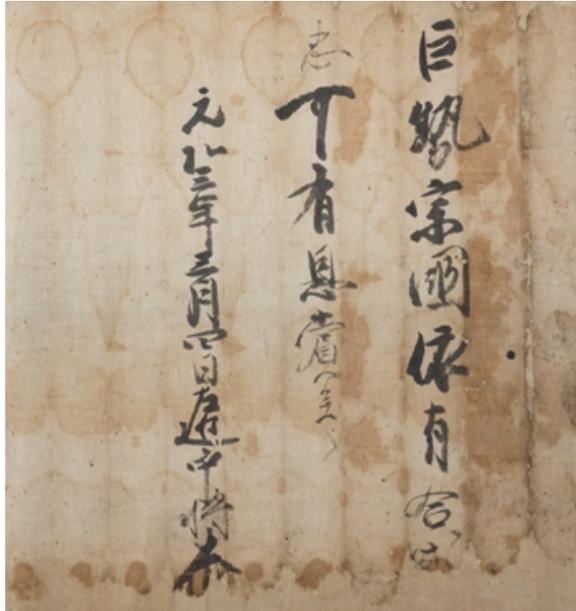


中世

第6章 中世社会の展開 1. 室町幕府の成立と南北朝の内乱 (1) 建武政権の成立

ごだいごてんのう せんじょうさん
後醍醐天皇と船上山合戦



後醍醐天皇
綸旨

〔相見家文書〕★

【意識】
巨勢宗国は、このたびの合戦で天皇に忠義を尽くしたので、きつと恩賞が与えられるだろう。
元弘三年三月四日
(千種忠顕)
左近中将 (花押)

【読み下し文】
巨勢宗国、合戦忠あるに依り、恩賞あるべし。
元弘三年三月四日
左近中将 (花押)

【釈文】
巨勢宗国、依有合□(戦)忠、可有恩賞矣、
元弘三年三月四日
左近中将 (花押)

解説

■後醍醐天皇の倒幕計画

北条氏による得宗専制が進み、鎌倉幕府に対する不満が高まる中、大覚寺統の後醍醐天皇は、1324(正中元年)年と1331(元弘元年)年に倒幕の計画を進めたが失敗し、隠岐へ流された。

1333(元弘3)年、隠岐を脱出した天皇は、伯耆国名和庄(大山町名和)の地頭である名和長年の支援を受けて、船上山(琴浦町)に城を構え、倒幕の兵を挙げる。天皇は船上山から全国各地の御家人たちに倒幕を呼びかける命令を出し、それを受けて多くの御家人が立ち上がった。

この戦いは天皇方の勝利に終わり、やがて鎌倉幕府が滅亡すると、後醍醐天皇は名和長年らとともに京都に復帰し、やがて天皇を中心とする建武の新政を開始していく。

■後醍醐天皇の綸旨

写真の資料は「綸旨」と呼ばれ、後醍醐天皇が自分の味方となって忠義を尽くしてくれた巨勢宗国という武将に、恩賞を与えることを約束したもの。

当時、天皇が自ら書状を書くことはなく、「綸旨」は側近が天皇の命令や意思を伝達する形で紙に記し、相手方に渡すのが一般的であった。この綸旨も側近の千種忠顕の名で出されている。

しかし、近年の研究によれば、この綸旨は後醍醐天皇の直筆であることが明らかになった。天皇が千種忠顕の名前を使って出した全国的にみても非常に珍しい資料である。



船上山(琴浦町) (©鳥取県)

(担当: 岡村吉彦)

参考資料

・鳥取県『新鳥取県史資料編 古代中世1 古文書編』100頁(2015年)

★の写真は教育活動以外での無断利用や転載を禁止します。